

5. 島原天草一揆と近世秩序(1) — 経済闘争か宗教戦争か

2025. 5.16. 大橋 幸泰

はじめに

島原天草一揆(1637～38)／幕藩体制成立期の矛盾が大きな規模で表出した最初の事件

→関係者の手記・証言・伝聞から実録物まで大量の記録が存在／当該期の史料の残存状況全体と比較すると驚異的な分量／研究も多数・多様だが、一揆の経過や天草四郎の実像など、事実の確定そのものが困難

*近年の研究で、興味深い論点

- ・「日本宗」対キリシタンとの対立を背景とした宗教運動(神田千里)
- ・一揆集団はポルトガルの援軍を待っていた(服部英雄)
- ・天草四郎は一人ではなかった(吉村豊雄)

→大橋の研究／江戸時代の人びとにとってどのような意味を持ったのかという点を見据えて、一揆の性格を考察／近年、人びとの多様な属性に注目する属性論を主張

*属性論：集団でも個人でも、単一の属性では完結しないことを意識する方法／キリシタンも属性の一つ

→経済闘争か、宗教戦争か／島原天草一揆を属性論で読み解く

1. 矛盾する矢文

一揆勢が立て籠もった原城において、幕府軍と一揆集団との間で矢文が交わされた

幕府軍(松平信綱)から、一揆勢への問いかけ／「天下ニ恨有之哉、又長門一分の恨有之哉」(史料1)

一揆勢から、幕府軍への返答／矛盾する複数の回答

a.キリシタン禁制さえ解除してくれればよい

「宗門に御かまい無御座候へハ、存分無之候」(史料2)

b.松倉氏の苛政に恨み

「高免被仰付……難納所仕」「責て長門守殿へ一通之恨申畢」(史料3)

一揆の原因／a を根拠にすればキリシタン禁制、b を根拠にすれば領主苛政

→幕府軍関係者の矢文に関する記録／a の内容(史料4)

*一揆勢の矢文の内容としては、キリシタン禁制への抵抗 a の方が信憑性がある

史料3は偽文書？

→同じ趣旨の文書が存在／小豆島の壺井家文書の矢文(史料5)／松倉氏の苛政に対する激しい批判

→島原天草一揆に幕府軍の水主として、小豆島の百姓が動員される／その中の一人が一揆後、持ち帰ったものか

*小豆島村役人の壺井家(坂手村年寄)の文書群から偶然発見された経緯から考えても、史料5は偽文書とは考えにくい／事実関係として、史料5の内容に矛盾はない／史料3そのものが矢文として放たれたものかどうかは不明だが、領主非法に対する抵抗という意識で一揆に参加した者もいたと考えるべき

2. 混成集団としての一揆集団

近年の原城発掘調査の結果

ア.人骨：原城落城時の凄惨な戦闘／イ.キリシタン遺物：キリシタン信仰の役割

ウ.石垣・瓦・遺構：強固な防衛機能／エ.陶磁器など日用品：生活機能

籠城の意味

a. 来世のため／終末思想により、殉教を覚悟

b. 現世のため／①各地の潜伏キリシタンに蜂起を呼びかける、②幕府軍による暴力からの避難

→全員が殉教を覚悟していたとはいえない／籠城者の論理は多様

* 一揆集団は実際、混成集団／参加強制・信仰強制もあり(史料 6)／純粋なキリシタン一揆とは言い難い

矛盾する矢文／一揆集団の多様性を示している／どれが主でどれが従とは断言できない

* 一揆集団の属性／キリシタンとしての属性(キリシタン禁制への不満)と世俗の百姓としての属性(領主苛政への不満)、両方を保持

3. 一揆集団の論理

信仰心の弱いキリシタンを(さらに非キリシタンをも)取り込む論理は何か？

* 中世以来の一揆の作法／一味神水(一揆契状・起請文の作成)により神威を帯びた集団へ／一揆とは神威を纏って正当化された集団／信仰心が希薄であっても人知を越えた神威は認知されていた

→島原天草一揆の場合、神威の中身がキリシタン(史料 7)／キリシタンへの「立帰」を促したのは、棄教への後悔、棄教による天罰(史料 8)

= 天候不順による飢饉、領主による苛政は、キリシタンを棄教したからだという後悔

* 信仰の保証と飢饉・苛政からの脱却という二つの願望は不可分／キリシタンの神威は、多様な属性の人びとによって構成される一揆集団をまとめる役割を果たす

おわりに

島原天草一揆の一揆勢：集団の属性は一律ではない／参加者一人一人の属性も単色ではない

* 経済問題と宗教問題、どちらかに原因を限定できない

→混成集団としての一揆集団の紐帯：キリシタンという神威

* 一揆：基本的に神威を纏って正当化された集団

【参考文献】

川野正雄『瀬戸内 小豆島』(名著出版、1988年)

長崎県南有馬町監修(石井進・服部英雄編)『原城発掘』(新人物往来社、2000年)

服部英雄「原城発掘」(荒野泰典編『日本の時代史 14 江戸幕府と東アジア』吉川弘文館、2003年)

鶴田倉造『上天草市史 大矢野町編 3 近世 天草島原の乱とその前後』(熊本県上天草市、2005年)

神田千里『島原の乱』(中央公論新社、2005年)

神田千里『宗教で読む戦国時代』(講談社、2010年)

五野井隆史『敗者の日本史 14 島原の乱とキリシタン』(吉川弘文館、2014年)

吉村豊雄『天草四郎の正体 島原・天草の乱を読みなおす』(洋泉社、2015年)

大橋幸泰『検証 島原天草一揆』(吉川弘文館、2008年)

【付記】

・日本史研究会史跡見学会／5月18日(日)13:00 JR南千住駅改札口集合。多くの人の参加を期待します。

・明日までに、Waseda Moodle にて講義記録の提出を求める。